

た。深夜から明け方まで捜索にあたることもあった。人の命にかかわる重圧のなか、チームワークの大切さや何事に対しても諦めないことを学んだ。

### 🌟国と国の懸け橋になるために

UWCで一番楽しかったこと、それは世界中から集まった友人たちとの交流だった。国際社会に関する知識の習得を目的とした学校行事も多かったが、より個人レベルで語り合うのもおもしろかった。自分の国の文化、宗教、教育、政治、経済、福祉に始まり、家族や恋人などプライベートなことまで話は及んだ。祖国の内戦で幼なじみを亡くしたことを涙ながらに語ってくれたセルビア人の友人。米国の豊かさに驚き、貧困にあえぐ祖国の発展に身を捧げる決意をしたパキスタン人の友人。衣食住ともに不自由なく、衛生的で安全な生活をあたり前のように送ることができると日本が、世界では極めて例外的な国であることを痛感した。真の友情が国境を越えて育まれることを肌で感じるなかで、私はUWC卒業後は国と国の懸け橋になるようなことができたら、と考えるようになった。そして日本の大学に進学し、国際関係を勉強した。新聞記者として世界中を飛び回る父の姿を見て、私もジャーナリストとして国と国の相互理解

の一助になりたいと思ひ、大学卒業後は報道志望で放送局に入社した。

ところが一年目はバラエティー番組(お笑い番組)を制作する部署に配属され、翌年事業局に異動した。事業局はコンサート、ミュージカル、美術展などさまざまなイベントの企画・制作・プロデュースを行う部署である。

私はクラシック音楽イベントの担当になり、主に海外のオーケストラやオペラの来日ツアーを手がけることになった。この仕事がかくおもしろく、当初希望していた報道記者としてより、文化芸術の交流という形で外国と日本をつなぐ一端を担う仕事の方が、自分には向いていることを知った。業務の半分以上を英語で行い、下見・契約交渉・ロケなどで主にヨーロッパの国々に赴く出張が続いた。国が変われば商慣習も変わり、大変だということもあったが、UWCの経験から考え方の

違いを壁と思わず刺激ととらえることが、自然にできるようになっていた。

事業局で手がけたオーケストラツアーでは、一〇名前後の楽団員・スタッフが来日し、二週間かけて全国七都市を巡る。オペラの場合は「引越し公演」(出演者や演奏者はもとより、現地で使用しているセット、衣装、照明・音響器具などすべて持って来る)のため、三五名前後が一月ほど日本に滞在する。その間は常に日本人スタッフと外国人メンバーとの共同作業、まさに大人版UWCである。彼らが自国の文化を象徴する最高の音楽で日本の聴衆を魅了し、他方で日本という国を好きになって帰国の途につく時、UWCで感じた充実感と同じ感覚を覚える。

入社以来一〇年間、ひたすら現場を走り続けた生活も、結婚と出産を機に大きく変わった。長男に次いで長女の出生のため、ここ二年ほど休職している。育児がこれほど楽しく、これほど大変なものだとは思っていなかった。一方で仕事も楽しい。私はUWCで学んだことを仕事、さらには社会に少しでも還元することが自分の使命だと思っている。その点ではまだ道半ば。かけがえのない貴重な経験をする機会を与えてくれたUWC日本協会やスポンサー企業の方々に感謝しつつ、今後は育児と仕事の両立を模索しながら、社会に貢献して恩返ししていきたいと思う。



山岳救助活動の訓練中に、ポーランド人の親友と

# 人生が変わった二年間

一九九二から九四年、UWC米国アメリカン・ウエスト・カレッジ(AW)に留学。九八年慶應義塾大学総合教育学部卒業、フジテレビジョン入社。

フジテレビジョン

高尾知与

たかお ともよ  
(旧姓・住田)

## ▼毎日が発見と驚きの連続

幼少期を米国で過ごした私には、いつかまた米国で生活したいという思いがあった。偶然買った留学情報雑誌にUWCの紹介を見た時、「これだ!!」と身震いした記憶がある。幸運にも奨学生に選ばれ、一七歳の夏、期待に胸を膨らませながら渡米した。いまの

私の原点となる二年間の始まりだった。

UWCアメリカン・ウエスト・カレッジ(AW)は、ニューメキシコ州の標高二〇〇〇mのロッキー山脈中腹にある。大自然に囲まれたキャンパスには吸い込まれそうな青い空が広がり、夜は満天の星で埋め尽くされる。世界七五カ国から言語・文化・宗教などバツクグラウンドが全く異なる生徒二〇〇名が集まり、寝食をともにする。多感な時期を親元離れて過ごすにはこのうえなく刺激的で、毎日が新たな発見と驚きの連続だった。

まずは国際バカロレア(世界九〇カ国で採用されている大学受験資格)取得を目指した学生生活。カリキュラムには英語・数学・歴史など通常の高校の科目のみならず、社会奉仕活動や卒業論文等も含まれており、幅と深みのある内容だった。

授業においては暗記中心だった日本の学校から一転して、常に「考える」姿勢が求められた。歴史の授業で出される課題が「第一次

●ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四三四名の卒業生を輩出している。

世界大戦が勃発した原因をあなたなりに分析し、議論し、一五〇〇語以内のエッセーにまとめなさい」といった具合だ。文献となる山積みの本に囲まれ、何度泣きながら徹夜でエッセーを書いたことか。しかし、この「問題提起して、納得のいくまで調べ、論拠を示し、議論し尽くしてから問題解決へ導く」という勉学に対する姿勢は、その後の自分の生き方にも大きく影響することになった。

社会奉仕活動はUWCならではのカリキュラムだった。AWはロッキー山脈の中腹にキャンパスが位置するという特性上、山岳救助活動が主流だった。一チーム五人構成でLeader(リーダー)、Navigator(進むべき方向や道の指令を出す)、First Aider(救出者の応急手当てを行う)などに分かれる。隊員は一つの担当に特化し、日ごろはトレーニングを積む。私はFirst Aiderを志し、米国赤十字社の救急救命士の資格を取得後、技能向上を目指してインストラクターの資格も取った。州内で遭難者・捜索願が出ると私たちボランティア隊員も積極的に救助活動に参加し

